

『普勸坐禪儀』と『正法眼藏坐禪箴』

——その本證思想に關連して——

黒 丸 寛 之

『普勸坐禪儀』が、中國宋代に於ける坐禪觀を代表するとみられる禪苑清規所載の坐禪儀を、批判して撰述されたといふことは、『普勸坐禪儀撰述由來』によつても明かなことであるが、それは同時に、中國宋代の禪風を繼承する『興禪護國論』の坐禪觀をも肯定し得ないものであつて、そこに宋朝禪の傳統とはその系統を異にする獨自な宗風が、道元禪師によつて擧揚されたと見なければならぬ。このことは禪の歴史の上でも重要な意義をもつものであると考えられる。

『禪苑清規』の坐禪觀と『普勸坐禪儀』の坐禪觀との相違は、そのまま中國宋朝禪と日本曹洞禪との相違を示すものであつて、その詳細に互る比較研究は、秋重義治教授によつて既に明かにされているところである。すなわち形態的には同一の坐禪であつても、修から證へと向う前者の坐禪に對し、證より轉開する後者の坐禪は、内容的に一大轉換をなしているのである。この二つの坐禪儀を對比してみると、當然のこ

とながら、前者において強調する禪定、習定の語及びその思想が、後者においては上述の立場から悉く削除されていることが知られるのであるが、坐禪を行の中心とする禪門において、禪定思想を否定するということは、待悟爲則を禪とする一般概念からは、ほとんど理解し得ない所であるといわなければならない。

『普勸坐禪儀撰述由來』にもいうように、禪苑清規の坐禪儀には、坐禪の眞實義が昧沒されているという主張の根底には、道元禪師が參じた得法の本師、天童如淨の坐禪觀が大きな力になつている。天童如淨は「參禪は身心脱落なり」といふ「身心脱落とは坐禪なり」と説示されたといわれる。すなわち坐禪という行が、身心脱落という證と一如であつて、この修證不二の坐禪が『普勸坐禪儀』撰述の根底となつているのである。右の如淨の語は『寶慶記』をはじめ『正法眼藏行持』『正法眼藏三昧王三昧』その他、道元禪師の著述の隨所

にかかけられ、それが禪師自身、身心脱落の體認によつて自らの坐禪觀として示されているものである。しかもこの修證不二の坐禪が、禪師において非常な感激をもつて受けとられたということは、思想的には既に「本來本法性、天然自性身」の本覺思想に立ちながら、その體驗的解決を求めて禪門に投じたということからも窺われるように、如淨の會下における身心脱落の辨肯は、思想と行との葛藤を解明し、本覺思想にその生命を與えたという點において、はかり知れない大きな意義をもつものであつたからに外ならない。

『普勸坐禪儀』に於いても、天福本と流布本とを對比してみると、後者に施された修正が、右の修證觀をより一層明確ならしめんとして行われたことが明かであつて、流布本に新たに書き加えられた語句をみると、例えば「莫_レ圖_二作佛_一、豈拘_二坐臥_一乎」「思量箇不思量底、不思量底如何思量、非思量」「究_二盡菩提_一之修證也、公案現成羅籠未_レ到」「修證自不_二染汚_一、趣向更是平常者也」「合_二沓佛佛之菩提_一、嫡_二嗣祖祖之三昧_一、久爲_二恁麼_一、須_二是恁麼_一」など、道元禪師の佛法の眞髓を示す言葉が用いられ、身心脱落の意味するところを、簡潔に而も餘す所なく示している。殊に『普勸坐禪儀』冒頭の「原夫、道本圓通、爭假_二修證_一、宗乘自在、何費_二功夫_一」の語は、天福本、流布本に通じて一篇の綱格を示すものであり、本證の立場が強く打出されていることが知られる。すなわ

ち、本來本證なるがゆえに修證一如であるということを、禪師は前提としていたのであつて、本證は修行の結果として至りうる可能的理想態ではないことを述べているのである。そして正にこの點が、坐禪觀の一大轉換といえる所である。

『普勸坐禪儀』は、坐禪の儀則を中心として示したものであるから、その思想内容は『正法眼藏坐禪儀』を參看して知るべきであらう。例えば『普勸坐禪儀』に「此乃坐禪之要術也」とのみ示して、その説明を施していない「思量箇不思量底、不思量底如何思量、非思量」という、所謂坐禪における思惟について『坐禪儀』の卷ではこれを一篇の冒頭にかかけ、その詳細なる説述を行なつていたのであるが、こうしたところにも兩書の關連性が窺われる。すなわち『坐禪儀』にその大綱を示した本證の坐禪というものの意味内容を、思惟の面から説きおこして解明したのが、この『坐禪儀』一卷である。

藥山惟儼の道取せる思量、不思量、非思量ということについて『坐禪儀』には次の如く述べている。

いはゆる非思量を使用すること玲瓏なりといへども不思量底を思量するには、かならず非思量をもちゐるなり、非思量にたれあり、たれわれを保任す。

右の文中の「非思量にたれあり」ということは、非思量に「思量箇不思量底」すなわち不思量底の思量のあることを意味

し、「たれわれを保任す」ということは、不思議底の思量が非思量を保持することを示すものである。従つて、坐禪人の本来の面目である非思量の内容が「思量箇不思議底」であり、思量が不思議にして行われていることが、即ち非思量であるというのである。これは『坐禪箴』の末尾に「不思議而現、不同互而成」といつている不思議にして現じている當體が非思量の處であつて、『普勸坐禪儀』で云えば「全體遍かに塵埃を出す」という全體の立場を示すものである。すなわち、坐禪は無邊際に住することであるから、その思惟は非思量（絶思量）となり、一切の思念は非思量の上の念起念滅として現するものであるということになる。この非思量によつて示される全體を指して本證といつていたのであるから、本證とは經驗以前の本来の事實であると云つてよいであらう。従つて、本證の坐禪は、本来の事實をそのままに受用するものであるから、修證隔別の坐禪觀は、この立場からは當然否定されなければならないのである。

『坐禪箴』の卷には又、南嶽懷讓の「若執坐相非達其理」の語について次のように述べている。

いはゆる執坐相とは坐相を捨し坐相を觸するなり。この道理は、すでに坐佛するには不執坐相なることえざるなり。不執坐相なることえざるがゆゑに、執坐相はたとひ玲瓏なりとも、非達其理なるべし。恁麼の功夫を脱落身心といふ。

この文に「不執坐相なることえざるなり」というのは、「執坐相」を肯定するもので、正身端坐（坐禪）することを云つていたのであるが、それが「すでに坐佛するには」と述べて、本来成佛（本證）の坐禪を説いているのである。この若執坐相の若の字をすでにというのは理解し難いようであるが、同様の語法は『佛性』の卷にも見られるのであつて、「時節若至、佛性現前」の語について「若至は既至といはんがごとし……時節すでにいたれば、これ佛性の現前なり」と述べて、本来の意味に用いているのである。その本来成佛の坐禪を、ここに玲瓏ともいい、非達其理とも説いているのであるが、このような坐禪は、意識經驗以前の身心の絶對性に住するのであるから、また脱落身心とも云つていたのである。従つて原本的な本然の事實からは、やがて至るべきものとしてはあり得ないのであつて、常に現成公案の世界が開演されているということになる。

『普勸坐禪儀』が撰述され、『坐禪箴』の卷が開示されるに至つた所以は、上述の本證の坐禪を普く知らしめんがためであつたと云える。天童如淨の「參禪は身心脱落なり」「身心脱落とは坐禪なり」という修證不二の坐禪が、道元禪師に至つて「本證を出身すれば妙修通身におこなはる」という本證の坐禪の確立となつたことは、坐禪觀の推移の上に、又禪の歴史の上に重要な意義をもつものであると考えられる。